

第1章

春菜と初めての彼氏、そしてコスプレ



シャワーを止めると、水音の止んだ浴室に静寂が満ちる。

浴室から出て洗面所の鏡の前に立つ。Hカップの大きな胸にくびれた腰、豊かなヒップの少女が鏡の中から私を見返す。髪をまとめていたタオル取ると背中の中程まである艶やかな黒髪がはらりと落ちる。

同年代なら誰にも負けないくらいいの身体をしていると思う。それを維持するための努力だつて日夜欠かしてはいない。

だつて私は——コスプレイヤーなのだから。

「春菜ちゃん、こっちは準備出来たから」

「はい。サイトウさん、いま着替えますからちよつと待っててくださいね」

ベッドルームの方から声をかけてきた男に返事をする。視線を下げれば、綺麗に畳んで置いてある『榛名』のコスプレ衣装がある。

この部屋は彼——サイトウ——が撮影のために取ってくれた高級ホテルの一室だ。これからこの部屋で、

次のイベントに向けての新作コスプレ写真集ROMの撮影が待っている。

鏡を見ながら衣装を身につけ、私は女子高生の春菜から『榛名』になる。

「じゃあ、撮影始めようか」

「はい。可愛く撮ってくださいね？ 期待してますよ」

広い高級ホテルの一室、窓のそばで私は彼のカメラに向かつてポーズを取る。カメラ越しにでも彼の視線が私の身体に欲情しているのがわかる。

そのことは別に構わない。彼と私は既に単なるカメラマンと被写体ではないのだから。

成り行きで彼が私を抱いたあの夜以来、私は彼に身体を提供し、彼は私のコスプレイヤーとしての活動を資金や機材の面から援助する関係が続いている。

なんとたつてカメラマンとしてのサイトウさんの腕は折り紙付きだ。サイトウさんに撮影してもらったコスプレROMはどのイベントでも大した売れ行きだった。

そういえば。

榛名のコスプレであられも無いポーズをとって写真に収まりながら私はふと思いつく。

別れた彼氏——私にとって初めての彼氏だった彼。彼にこうして、榛名のコスプレ衣装を着させられて抱かれたときのことを。

*** 一年前 ***

「うーっす 春菜、待たせたな」

「大丈夫だよ、私もいま来たばかりだから」

校門を出てから一ブロック、角を曲がったところのコンビニの前で待っていると彼がやってくる。横に並んで歩き出すと同時に私はそっと彼の腕を取る。

同い年で幼馴染みの彼から告白されたのは中学校の

卒業式の日だった。

高校は違う学校になってしまったので会えるのは放課後だけだけれど、こうして毎日迎えに来てくれて一緒に帰っているから寂しさはそんなに感じない。

彼の家は、ここから私の家まで歩いて帰る途中なのでここからの帰り道はずっと一緒だ。歩いて通学できる距離の学校に進学した私に対して、彼はバスで十五分の所へ通っているので朝は徒歩とバスで別れてしまつて会えない。

だから毎日こうして帰りに迎えに来てくれるのは本当ありがたい限りだった。

「春菜、今日…… うち、寄っていきける？」

「……うん」

そして、大事なことはもう一つ。

転職して急に忙しくなったとかで、最近彼の両親は週に二、三回のペースで深夜まで帰つてこなくなつた。おかげで彼の両親の帰りが遅い日は一緒に帰つた流れで私はそのまま彼の部屋にお邪魔している。

健康な高校生のカップルが親の居ない家で二人きりになつたらどうなるか。平凡な私たちは、誰もが想像するとおりの成り行きを迎えていた。

「お邪魔しまーす。んうっ…… 待って、部屋に行つてから……」

彼の家に到着して二人で玄関をくぐる。ドアを閉めて外の目が無くなると同時に抱きしめられてキスをされる。

そのまま乱暴に胸を揉みしだかれ、スカートをめくられて下着の中に指を入れられる。

最近とみに大きくなりセーラー服の胸元を押し上げる胸をブラジャーごとこね回されて私は痛みに眉をかめる。

「きょうは体育の授業で汗かいちゃったから…… シャワー浴びてから、ね？」

そつと突き放すようにして彼を押しのと途端に不満そうな顔をされて悲しくなる。

「俺、昼間ずつと春菜のこと考えててさ…… やつと

会えたから、もうこんななんだよね」

彼が自分の股間を指差すと、そこはズボンの上からでもはつきりとわかるくらい勃起していた。というより、二人で一緒に帰っている途中から彼はあからさまに勃起していて、隣を歩いている私は少し恥ずかしかつた。

「Hは部屋に行つてからでいいから、とりあえず口とか手でしてくれない？」

そう言いながら彼はねっとりとした視線を私の全身に向ける。この様子では断つたら無理やりこの場で挿入されてしまうかもしれない。

気づかれぬように小さくため息をつき、私は彼の元にひざまずく。ベルトを外してズボンとトランクスを下ろすと赤黒く充血した彼のペニスが天を衝く。

手で扱きながらペニスの先端にキスをすると彼は興奮した息を漏らす。初めて見たときにはあまりにグロテスクなのでまともに視線を向けられなかった彼の勃起したペニスも、何度もこうしてしゃぶらされている